丸尾五左衛門への旅・史実とロマン
塩飽史談会研究発表要旨

安藤孝治

〔平成11年10月28日（木）於丸亀総合会館－視聴覚教室〕

①「丸尾五左衛門」は世襲名である

牛島の廻船問屋「丸屋」こと丸尾五左衛門家では、初代五左衛門長雲から十代の五左衛門俊次までの当主のうち、六代喜平次久隆と、九代七郎左衛門恒忠を除き、あとの七人は初代が名乗った“五左衛門”を襲名している。

※（資料 1号－「丸尾五左衛門家系譜」）

初代五左衛門長雲はもと肥後熊本藩の武士だったといわれ、当時は東氏を称していたことが、同家過去帳末尾の系譜の記録に書き残されている。

過去帳にある系譜は時をおいて三回書き継がれていることが、筆跡の違いで明らかで、最初は二代重次までの名があり、これは重次の自筆であろうと思われる。

その根拠は、末尾に元禄六癸酉（1693）年とあり、翌年の元禄七年に重次が亡くなっていることから、重次自身がその存命中に、子孫に対して先祖は東姓を名乗っていたことを、ことさら書き遺したものではないかと考えた。

※（資料 2号－「同家過去帳系譜抜粋」）

五左衛門長雲は承応三(1654)年、徳川四代将軍家綱の時代に没。一説に五十六才で没したとあるが、根拠が曖昧なのでここではその説はとらない。ただし、次に述べることから、おおよそ、関が原の合戦前後の出生ではないかと想像出来る。その理由は、二代重次は元禄七(1694)年満六十八才で没。従って寛永三(1626)年の出生である。かりに、初代長雲 25 、6 才の頃に重次が生まれたとすれば、長雲の出生は慶長五(1600)年の関が原の合戦前後頃ではないかと考えた。すると、長雲の五十六才没説もあながち大きく外れてはいない。あくまで仮説のうえでの話であるが。

丸尾五左衛門家は、二代重次から、三代重正〔宝永 5(1708)年38才で没〕を経て、四代正次〔宝暦 6(1756)年65才で没〕時代まで廻船問屋として伝説にも残るような大変な隆盛を極め、五代応蔵〔明和 2(1765)年没〕の時代には衰運期に入っている。

応蔵が何才で没したかは記録がないので、その出生の年は不明である。

丸尾家の隆盛時代は百年余り続いたが、その後、江戸幕府の廻米輸送政策の変更により次第に衰運への道を辿ることになる。その隆盛期は、三代将軍家光から五代将軍綱吉時代、さらに八代将軍吉宗時代をへて十代将軍家治の時代におよんでいる。

江戸時代中期には塩飽船方とともに繁栄した五左衛門家が、その後衰運期を迎える歴史的背景と、その経緯については次章以降に述べる。

② 廻船問屋として隆盛をきわめる

幕府が廻米の海上輸送方策を河村瑞賢（軒）に命じ、太平洋岸沿いコースの開拓が行われたのが寛文十(1670)年。ついで寛文十二(1672)年に瑞賢による西廻り航路が開かれた。幕府が従来の請負制度をとりやめ、直営の廻船による廻米輸送政策に切りかえたことにより塩飽の海運業はかつてない隆盛期を迎え、廻船問屋で船主でもある丸尾五左衛門家は、所謂“北前船”による塩飽船方の活躍とともに、時代の波に乗ることになる。

そして五十年後、幕府の政策が直営方式から再び請負制度に変更されたことで、大打撃を受け、往年の北前船の活躍も次第に不振に陥り、塩飽の船方とともに繁栄してきた丸尾五左衛門一家も衰亡の一途を辿ることとなった。

なお、幕府の廻米輸送政策の変遷の詳細については次の章で述べる。

③ 幕府の廻米政策と塩飽の船方

真木信夫「丸亀の港と塩飽の船方」(P.10 以降）、及び「新編丸亀市史・近世編」(P.199以降）、その他諸史料により、幕府の廻米政策の変遷を紹介する。

当初、幕府の廻米政策は、大消費地の江戸・京・大坂に重点的に米を集めるため、商人に請け負わせ船舶輸送をさせたが、計画どおりにはことが運ばなかった。

幕府は、まず、奥州地方の天領の御城米（廻米）を太平洋岸航路で江戸へ、その後日本海沿岸各地の米産地から、日本海・瀬戸内海を経由するコースで江戸・大坂への廻米を輸送する計画をたてることになるが、その変遷を次に述べる。

明暦二(1656)年十月、幕府が大坂の商人川崎屋喜右衛門他二名に請負わせたが、計画どおりにはことが進まなかった。その主な理由は、航海技術の未熟さから難破、座礁などの事故が多発して、目的地まで米が届かなかったり、荒天による冠水で米の商品価値がいちじるしく低下するなどの不都合もしばしば発生している。

翌、明暦三(1657)年には有名な「振り袖火事」で江戸の大半が灰塵に帰し、このあと米不足がますます深刻になる。

万治二(1659)年、出羽国の廻米を江戸商人正木半左衛門他に請負わせたが、請負料金が高くつく反面、需要量の確保も困難だった。

ここにおいて、先にも述べたとおり幕府は直雇いの廻船による直営方式を検討、経世家河村瑞賢に安全確実な航路の開拓を命じ、この時運に乗って塩飽船方とともに丸尾五左衛門の興隆が始まったことは郷土史の諸史料に明らかである。

ときを経て、享保五(1720)年九月、幕府は従来の「御用船」による直雇い方式を変更、江戸の商人筑前屋作左衛門他に命じ雇船方式をとる。以後、塩飽船隻は単なる雇い船となり、塩飽船方と丸尾家の凋落が始まった。

④ 丸尾五左衛門一族は篤信家

丸尾五左衛門家は代々非常に信心深く、牛島では極楽寺の建立や八幡宮へ石灯籠の寄進、その他本島の正覚院、金刀比羅宮、善通寺本山への寄進も多い。信仰心の厚い気風は、長喜屋その他塩飽の船方衆にも共通のものだったに相違ない。

讃岐の地方(じかた) にくらべて、塩飽諸島には寺院が多いが、深い信仰心はもとより、島民が富裕であったことにもよる。その大多数が真言宗で、丸尾家も真言宗徒である。

⑤ 塩飽の埋め墓と拝み墓

牛島の“小山”と“里”には、初代長雲から十代俊次までの、当主と一族のみが静かに眠り続けている広い墓域がある。

※（資料 3号－「墓地配置図」－故丸尾重俊氏作成）

塩飽諸島にはいつの頃からか、両墓制の風習があり、埋め墓と拝み墓とを分けて作っていたが、丸尾家の場合その風習によっているものかどうかは知らない。

九州熊本あたりには、土地の豪族や庄屋一族のみの広大な墓域があるが、丸尾家では遠祖の地の風習によったものか、そのあたりの事情もわからない。

あるいは、讃岐にも丸尾家のように一族だけの墓域を設ける風習があったのかどうか、ご存じの方の教えを乞いたい。

島の北岸に丸尾五左衛門家の屋敷跡があり、その付近に丸尾家の墓がある。これは明らかに後代のもので、拝み墓として造られたものだと聞いた。

◎（横山政一氏談）

⑥ 丸尾五左衛門への旅

しばらく私事にわたる話で甚だ恐縮であるが、丸尾五左衛門家に関係する話につながるのでお許し願いたい。

少年の頃、父から先祖は丸尾五左衛門家と縁がある、という話を時折聞いていた。

祖父参次郎が、多度津の丸尾家から養子に来たことによる。当時は格別の関心もなかったが、後年、遠方の親族達の要請もあり、やっと重い腰をあげることにした。

昭和53年 6月25日の四国新聞「讃岐人物風景」シリーズで丸尾五左衛門一族に関する伝記を読み、これが契機となって祖父参次郎の生家の調査に着手する。

平成 5年10月、多度津丸尾俊一家の「過去帳」「過去靈簿」を拝借し、コピーを取らせて頂いたが、その中に祖父参次郎の名は無かった。わずか三代前の祖父出生の系譜が不明のままに終わるのかと、残念な思いをしたものである。

話が突然飛躍するが、その後、丸尾五左衛門家とは深い姻戚関係にある、別系統

の丸尾家の存在が判明したので、ここに紹介しておきたい。

現在、千葉県我孫子市に在住する丸尾　廣氏ご一家のことであるが、もともと、多度津町の出身である。

丸尾　廣氏の祖父、故丸尾猪太郎氏が、実に五百年をさかのぼる同家の始祖からの過去帖を丹念に整理されていて、平成 6年にその「写し」を送って下さった。

その中に、祖父参次郎の名前をついに発見することができた。調査に着手以来、実に16年目のことであった。

『丸尾五左衛門への旅』という表題は、祖父の生家を探し求める長い旅路をへて、やっと終着駅にたどり着いたという、ひそかな感懐によるものである。

以上、あえて私事を延べたが、祖父の生家を調べる過程で多度津の丸尾俊一家と、我孫子市の丸尾　廣家にそれぞれ伝わる過去帖にめぐりあえたことで、そこから新たに郷土史研究上の大切な史料が得られたことによる。

その中に“森甚左衛門”という、中・西讃地域での歴史的な一揆事件に関与する人物の名がある。丸尾両家に関係するこの人物については後ほど詳述する。

◎（当会場後方に丸尾五左衛門家の過去帳、過去靈簿コピーをご了解を得て展示）

⑦ 丸尾五左衛門家十二代丸尾俊一家

多度津町の丸尾俊一家には、過去帳以外に貴重な史料や伝来の什器類が保存されているが、なかでも興味深いものとして「肥後熊本藩細川家の借用証文」があった。

真木氏講演速記録にその顚末が詳しく語られているので、ここでは省略する。

◎（当会場後方に鎌田共済会郷土博物館蔵、借用証文及び請求書模写各一部を展示）

借用証文四通のうち、丸尾理兵衛宛となっているものが二通、五左衛門宛一通、五左衛門　代丸尾理兵衛宛一通である。但し、同家過去帳に“理兵衛”の名はない。

なお、丸尾家の史料で貸し出したままになり、散逸したものも多いと聞く。前述の「借用証文」も現在手元にはない由。郷土史研究上はなはだ残念なことである。

⑧ 丸尾家から肥後熊本藩主への貸金

貸付の詳細は次のとおりである。

- 第一回　宝永三(1706)年、銀五十貫、　利子壱ヶ月壱分五朱、理兵衛宛。
- 第二回　宝永三(1706)年、銀三十七貫三百目、利子壱ヶ月壱分五朱、理兵衛宛。
- 第三回　宝永七(1710)年、銀八十五貫三百目、長期借用で年利六貫五百六十目。
  この証文は丸尾五左衛門宛。
- 第四回　享保五(1720)年、銀五十一貫三百三百九十六匁、利子壱ヶ月壱分五朱、
  この証文は丸尾五左衛門　代丸尾理兵衛宛。

そして百年後、丸尾五左衛門家は、細川家に対し逼塞の窮状を訴えて返済を求めたが、ついにその願いは空しく終わったことになる。

その間の事情について少し詳しく述べることとする。

細川家に対する第一回、第二回の貸金は、当主三代重正の最晩年で、亡くなる二年前のことである。

第三回は四代正次十才の時、第四回は正次二十才の時である。

ここで、理兵衛がこの重大な貸付に関わっているのだが、同家の過去帳にその名は無い。しかし、当主の代理を勤める重要な立場にあったことは間違いない。

理兵衛について、文献・史料などでご存じの方にお教え願いたいものである。

百年後に、細川家に対し貸金の返済を求めている。文政五(1822)年十一月と同年十二月の二回にわたって、「恐レ乍ラ願イ奉ル口上書」という書面を細川家御取次衆の高　作兵衛他宛に提出している。内容は実に綿々と情理をつくした文章である。

願い出たときの当主は七代五左衛門であるが、「平右衛門（丸尾五左衛門伜）」とあり、この平右衛門の名も同家過去帳に出ていない。幼名かとも思われるがそのあたりの事情はわからない。

実に、百年後の請求であり細川家としても面食らったに相違いない。

借銀を返却していない証左として、史実か否かは別として、何時の頃のことか、また、何代目の藩主か審かではないが、江戸から下向の途次ひそかに牛島丸尾家に立ち寄り、詫びの挨拶をしたとのこと。丸尾家としては細川侯を迎えるにあたり、わざわざ新たに門を作り、礼をつくしたという話がある。そのとき拵えた門のことを“お成門”後年“お詫び門”と呼び、いまは他家に移され現存しているとも聞く。

⑨ 森家（後、丸尾と改姓）と丸尾五左衛門家との関係

先述の丸尾　廣氏について詳述すると、丸亀中学校卒業後、旧制高校～東大卒。その後企業に勤め、現在は千葉県我孫子市に定住。

祖父丸尾猪太郎氏は仏教に関する学識・造詣ともに深く、浄土真宗の熱心な信徒でもあった。大正・昭和初期の高名な仏教学者池山栄吉師に傾倒し、親しく謦咳に接しておられたようで、他にも多くの仏教学者達と交流があったという。

以下、丸尾猪太郎家の「過去帖」について触れる。

始祖金左衛門平祐清は明応九(1500)年の生まれ、平氏の末裔と言う。もとは「森」姓を名乗る古い家系である。

この一族の森甚左衛門が、寛延三(1750)年の西讃百姓一揆首謀者七人中の一人として、同年七月二十八日多度津葛原で斬首刑に処せられた。

丸尾猪太郎氏が整理された同家の「過去帖」に森甚左衛門刑死の記録がある。

後世「七人童子」と呼ばれ、西讃地方ではいまも慰霊の祭祀が行われ、七人の遺徳を偲ぶ碑が各所に建立されている。当時、中西讃地方では大事件であった。

なお、中西讃の各市史、町史に甚左衛門は金倉河畔で処刑とあるのは誤りであると郷土史研究家宮武　進氏は説く。その理由は、碑殿は多度津藩領であり、葛原で処刑されたことは間違いない、とのこと。

いまひとつ誤りを指摘しておく。同じく中西讃の各市史、町史に“甚左衛門”をことごとく“甚右衛門”としてある。当初、別人かと思ったが、丸尾猪太郎氏整理の過去帖、佐々栄三郎著西讃百姓一揆始末の掲載写真によっても“甚左衛門”であることは明瞭である。左、右を読み誤って、後世、甚左衛門が甚右衛門と誤り伝えられ、甚右衛門が罷りとおることになったものである。

◎（当会場後方に、佐々栄三郎著「西讃百姓一揆始末」掲載写真及び、丸尾猪太郎家の過去帖コピーを同家のご了解を得て展示）

⑩ 甚左衛門の刑死と森家のその後。丸尾五左衛門との関係。丸尾　廣氏の手紙。

「西讃百姓一揆始末」の森甚左衛門の項では、著者自身の調査記録がある一方、丸尾　廣氏からの書簡に、森甚左衛門と丸尾五左衛門との関係が記されているのでここに紹介する。（以下、丸尾　廣氏書簡より）

『当家（森家）は寛延の変による、家族の難を避けるため、丸尾氏（五左衛門家）に拠り、日向の丸尾氏別荘に亡命し、恐らく十年前後は日向で過ごしたと思われます。それ以後当家は丸尾氏を称す』とある。

なお、同家の過去帖に“貞女”が丸尾五左衛門家へ嫁したとあり、口碑によれば初代か二代目五左衛門に嫁ぎ、その後も一人嫁いでいると丸尾　廣氏は語る。

過去帖によると、一揆の後、時の当主金兵衛祐儀末子祐貞が五左衛門家に拠るとあり、この人物が後述の佐々栄三郎著「西讃百姓一揆始末」にでてくる本人ではないかと考えられる。とにかく両家の縁が非常に深いことは間違いない。

因みに、丸尾猪太郎家（森甚左衛門家）の旦那寺は多度津山階の蓮忍寺である。

京極藩が一揆首謀者を処断した際、甚左衛門の弟六兵衛は罪一等を減ぜられて、ところ払い（闕所）の刑に処せられている。しかし、家族まで連累を恐れて日向へ逃れる必要があったのか、私は疑問をもっていた。

最近「西讃百姓一揆始末」を読みなおしたところ、その疑問が解けた。

『甚左衛門には妻や子供もあったであろう。その人たちは、六兵衛や、その家族と共に、土地、家屋を没収されて、村から追放されたのである。』つまり六兵衛に

とどまらず一家眷属が、土地家屋を没収され、村から追放されるという苛酷な刑を受けている。

京極藩の厳しい眼をさけて、丸尾五左衛門が森甚左衛門一家を庇うことの危険をも顧みず、あえて日向に匿ったということは、ただならぬ覚悟だったであろう。

ひとつ間違えば丸尾五左衛門家そのものが、藩のお咎めを受ける破目におちいることをも承知のうえで六兵衛たちを庇ったのか。

ときの当主は四代正次で齢すでに六十、後継者五代応蔵の時代のことであるが、縁者六兵衛たちに救いの手を差し延べたことは、大変な英断だったに違いない。

佐々栄三郎はさらに『多度津町に丸尾熊造という人がある。甚左衛門には一人の男子があり、早くから牛島の豪商丸尾五左衛門にあずけられていたが、甚左衛門の刑死の後も五左衛門によって育てられ成人した。その遺児こそ、丸尾熊造氏の祖であるというのである。二、三十年前に聞いた話である。』と書いている。

丸尾猪太郎氏の「過去帖」には、そのとき五左衛門にあずけられた祐貞のことも、丸尾熊造氏の名前も出ている。

丸尾熊造氏は明治のころ、多度津町会議員として鉄道誘致に尽力しており、他に数々の要職を兼ねて町政に貢献したと、多度津町誌に書かれている人物である。

佐々栄三郎は、善通寺市瓦谷の野田照美氏方で、森家（甚左衛門を含め）の位牌を発見している。我孫子の丸尾　廣家とは当然縁続きであるわけだが、どのような繋がりであったのか、わからない。

※（資料 4号－佐々栄三郎著「西讃百姓一揆始末」抜粋）

⑪ 善通寺市吉原町東碑殿の十一面観音像

平成７年２月、善通寺市吉原郷土史研究会会長池田富三郎、会員の斉藤速見両氏に入江幸一氏を介して会い、次のような話しを伺った。

池田氏によると、吉原町東碑殿の観音堂に、丸尾五左衛門が寄進したと言い伝えられている“十一面観音像”（立像1.2㍍）がある。東碑殿と牛島では離れすぎているのに、いかなる縁で寄進されたかその事情を調べている。一説では五左衛門のお妾さんが寄進したとも伝えられているが、はっきりしたことがわからない。丸亀で何かわかれば教えて貰いたい、とのことであった。

※（資料 5号－「郷土史誌『よしわら』抜粋－碑殿の森甚左衛門」）

これに対して、前述の丸尾五左衛門と東碑殿の森甚左衛門一家との関係を説明。森甚左衛門の菩提を弔うための寄進に間違いないと断定し、池田氏等は了解して帰られた。丸尾猪太郎氏「過去帖」が史料としての役目を果たしたわけである。

※（資料 6号－「善通寺吉原町観音堂十一面観音像」）

⑫ 極楽寺「無間の鐘」と淨嚴和尚

長徳院極楽寺には伝説で有名な「無間の鐘」があり、淨嚴和尚の銘がある。

真木信夫氏の講演速記録に『淨嚴和尚という方は五代将軍綱吉の非常な知遇を得て、江戸の湯島に観音堂を建てたり、総本山靈雲寺の開基和尚になったような偉い坊さんでありますが、その坊さんが牛島に来ているのであります。これは丸尾五左衛門などの船持衆の招きによって来島したのであります』とある。

このときの五左衛門とは、同家の過去霊簿序文で、二代目重次であることが明瞭。過去霊簿の「延宝午初商」は延宝六戊午(1678)年初秋のことである。しかも、末行に「淨嚴敬題」の文字があるので、淨嚴和尚が自ら書き記したものかとも考えられるが、文字があまり筆馴れしていないので、或いは淨嚴和尚が書いた文章を、別人（重次か）が書き写したもののようにも受け取れる。

このあたりの事情を調査中、たまたま、淨嚴和尚の事跡調査をしている西宮市の大手前女子大学藤井直正教授の知己を得、その論考集を頂いたので一部紹介する。

※（資料 7号－「過去霊簿　序文－解説」

⑬ 南条町寿覚院の丸尾五左衛門ゆかりの墓

寿覚院に丸尾五左衛門の縁者の墓がある。どうも五左衛門のお妾さんの墓らしい。牛島の見える高いところへお墓を作ってほしい。私は死んでも牛島を見つづけたい。・・・この健気(けなげ) な話は少年時代から何度か聞いた記憶がある。おそらく皆さんのなかにもご記憶の方がおられるに違いない。真木信夫氏の講演速記録にも同様の話が、流説のまま紹介されている。

ところが、丸尾五左衛門家の過去帳には戒名「智光恵印」俗名「丸亀於由・重正内室」、「元禄十四年辛巳五月三日」とあり、寿覚院の墓碑銘と一致している。

墓の主は三代五左衛門重正の正妻と判明したわけだが、世間の口とは、東碑殿の十一面観音の場合と同様、よほど五左衛門とお妾さんを結びつけることが好きだったものか。或いは、お妾さんを囲える身分を、裕福の象徴として羨望してのことか。

元禄十四年は西暦1701年、三世紀の昔に建立されているが、まったく風化していないことに驚く。２㍍もの壮大な墓碑である。それにしても、博徒が勝負の縁起ものとして、打ち欠いて持ち去った傷痕が痛々しい。

郷土史研究家遠藤　亮氏によれば、神戸六甲山麓の御影産出の硬度の高い花崗岩をとくに“御影石”と呼び、稀少価値がある。自然に含有するマンガンが酸化して淡紅や淡赤く見えるのが特徴である。これを、ことさら紅御影、赤御影というのは俗な言い方である。寿覚院の於由の墓碑は御影石である、との話であった。

◎（当会場後方に、於由の墓碑写真展示）

⑭ 丸尾五左衛門とロマン、そして多くの謎

丸尾五左衛門一族の華やかな興隆の時代とその衰退の軌跡を辿るとき、私はいつも、夏の夜空に打ち上げられる“花火”を連想してしまう。大きな音響とともに勢いよく天空に舞いあがって華々しく絵を描き、そして音もなく消えてしまう、あの花火のことをである。芭蕉に“おもしろうて　やがて悲しき　鵜飼かな”という句がある。いずれも、“華やかさと空しさ”であり、“もののあはれ”でもある。

五左衛門の場合、人々の感性に訴えるロマンが息づき、そこに説話や伝説が豊かに育くまれてきたと言うことなのであろうか。

あえて、さらに言えば、丸尾一族の盛衰にまつわる話の中には、“挽歌”の匂いも嗅ぎ取ることができる。

しかし、いくら語り来たっても丸尾五左衛門には多くの未開明の謎がつきまとう。最後に、その事について考えてみたい。

① 丸尾家第十一代故丸尾重俊氏が、熊本の郷土史家の協力を得て調査した結果によって、丸尾五左衛門初代長雲は熊本藩の下級武士（五人扶持）だったということは最初に触れたところである。それが何故、はるか離れた瀬戸内の牛島に来たのか、その事情とはどういうことだったのか。これにも謎がある。

② 牛島に来て、わずか父子二代で廻船問屋、船持衆として磐石の基盤をどのようにして築き得たのか、謎である。

③ 丸尾五左衛門にまつわる説話・伝説のたぐいが多いことは、先に述べたことだが、「無間の鐘」「珊瑚の杖」「船揃えと金の扇」などの他、亜流の伝説めいた話を含めるとまだまだある。

ところが、牛島では丸尾五左衛門に次ぐ長喜屋伝助という同業者がいた。長喜屋に関しての伝承・民話は聞いたことがない。ここにも、何故かが残る。

④ 牛島の北海岸には丸尾五左衛門の屋敷跡があり、いまは礎石のみが残っている。堂々とした大きさで、礎石から想像する限り当時は豪邸が建っていたであろう。

冬場の季節風を考えて、さぞ堅牢な造りだったに違いない。それが何故跡形もなく消えたのか。永いあいだ疑問だった。

この疑問は、徳山先生の「塩飽廻船と丸尾五左衛門」に、明治中期までは屋敷があったとお書きになっているのを拝見して納得できたが、それにしてもその後全く跡形も無くなっている。一方、長喜屋伝助の屋敷はいまもある。

⑤ 寿覚院の於由の墓の流説はさておき、ここにも謎が多い。

五左衛門重正が三十一才のとき、於由は亡くなっているので、多分二十代の若さだったと考えられる。

先ず、並はずれて大きく貴重な御影石の立派な墓であることは、先に述べたが、主人重正の於由に寄せる深い想いが感じられる。

墓碑に「南無阿弥陀仏」とあるので、丸尾家の真言宗徒ではなく、浄土宗の信徒として葬られていることになる。ここにも何故かがつきまとう。

牛島には丸尾家一族の墓域があるのに、わざわざ寿覚院に独り葬られたの何故か。しかも、粗末に扱いことさら他所に葬られたのではないことは、墓碑の立派さでもわかるだけに、ここにも謎がある。

なお、寿覚院の過去帳には、於由の実家の親族とおぼしき名があると聞いたが、これは寿覚院が実家の旦那寺だったということであろう。この九月寿覚院を訪ねたとき、於由の墓にお花が供えられていた。三百年を経た今日、なお墓参をする縁者のあることを知った。

（了）